



生まれ育った京都への恩返しを — 公益財団法人 日新電機グループ社会貢献基金 —



小畑英明理事長

このコーナーでは、京都のまちづくりに取り組む企業・団体をご紹介します。今回は、平成28年度より京町家まちづくりファンドに継続的にご寄附をいただいている、公益財団法人 日新電機グループ社会貢献基金です。同基金事務局長の阪尻様と、事務局主査の浅井様にお話をうかがいました。

基金について教えてください。

当基金は、日新電機株式会社の創立100周年を記念して2017年に設立されました。次代を担う技術系人材の育成や文化財保護による地域の活性化、環境と調和し活力ある社会づくりに貢献するため、助成事業を行っています。

設立母体である日新電機株式会社は、電気エネルギーを安全かつ効率的に供給するために、発電所から送られる高圧の電気を受け取り用途に適した電圧に変換する受変電設備の製造などを主に行っており、その製品はショッピングモールや、地下鉄など皆さまの身近なところで使われています。また、スマホなどに使用される高精細ディスプレイを製造する装置では、世界シェア100パーセントを誇っています。以前から、小学校理科教室や河川の美化活動など様々な地域活動に協力してきましたが、基金の設立を機に社会貢献活動を拡充しました。

どのような活動をされていますか？

「技術系人材の育成、京都を中心とした歴史的文化財の保護、地域の環境保全活動への協力」という3つの基本方針のもと活動を行っています。技術系人材の育成では、電気系、情報系、材料・機械システム系の研究を行う大学院生で、経済的困難があり学業優秀な学生に対して奨学金を支給しています。アルバイトの時間を減らしてその分を研究に充てられる、学会への旅費が工面できるという声を聞くと嬉しく思います。そのほか、小学生向けのロボット工作教室の支援など、理系人材の裾野を広げる活動を行っています。文化財の保護では、京都市・まちセンと三者協定を結び、継続的に

寄附していく計画です。京都には必要な財源が確保できていない文化財が多くあります。そんな文化財や京町家を次世代に伝える助けになればと考えています。環境保全では、最近の取り組みですが、「京都モデルフォレスト運動」に賛同し、日新電機グループの社員とともに地域の森づくりを行っています。

京都への想いと、今後の展開を聞かせて下さい。

日新電機が京都で生まれて100年にわたって事業を継続することができたのは、多くのステークホルダーのご支援と素晴らしい産業の集積をもった京都で事業をしてきたお陰と感謝しています。当基金の活動はまだ始まったばかりですが、これからも活力ある京都であり続けられるようお手伝いをさせていただき、地域から頼りにされる存在になればと思います。

日新電機グループ社会貢献基金

<http://nissin.jp/sczaidan/>



3者連携協定締結の様子



創立100周年の石碑

京まち工房 85

公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター

特集

P2-3

嵐山まちづくり協議会が
11番目の地域景観づくり協議会に認定

CONTENTS

- (P1) 京都人②の京都知らず (P4) 京町家再生事例
- (P6) 地域まちづくり・京町家の専門家紹介/ようこそまちセンへ
- (P7) 私と京都/京都人②の京都知らず 編集後記
- (P8) 企業・団体紹介



平成30年度賛助会員募集中！

入会をご希望の方はまちセンにお問合せいただくか、ホームページをご覧ください

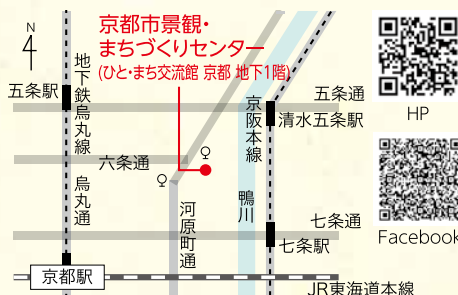
賛助団体のみなさま			
	ニュースレター 京まち工房 第85号 2018年12月 編集・発行 公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター		

公益財団法人 京都市景観・ まちづくりセンター



〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口
上る梅楽町83番地の1 (河原町五条下る東側)
ひと・まち交流館 京都 地下1階
TEL: 075-354-8701 FAX: 075-354-8704
E-mail: machi.info@hitomachi-kyoto.jp
HP: <http://kyoto-machisen.jp>

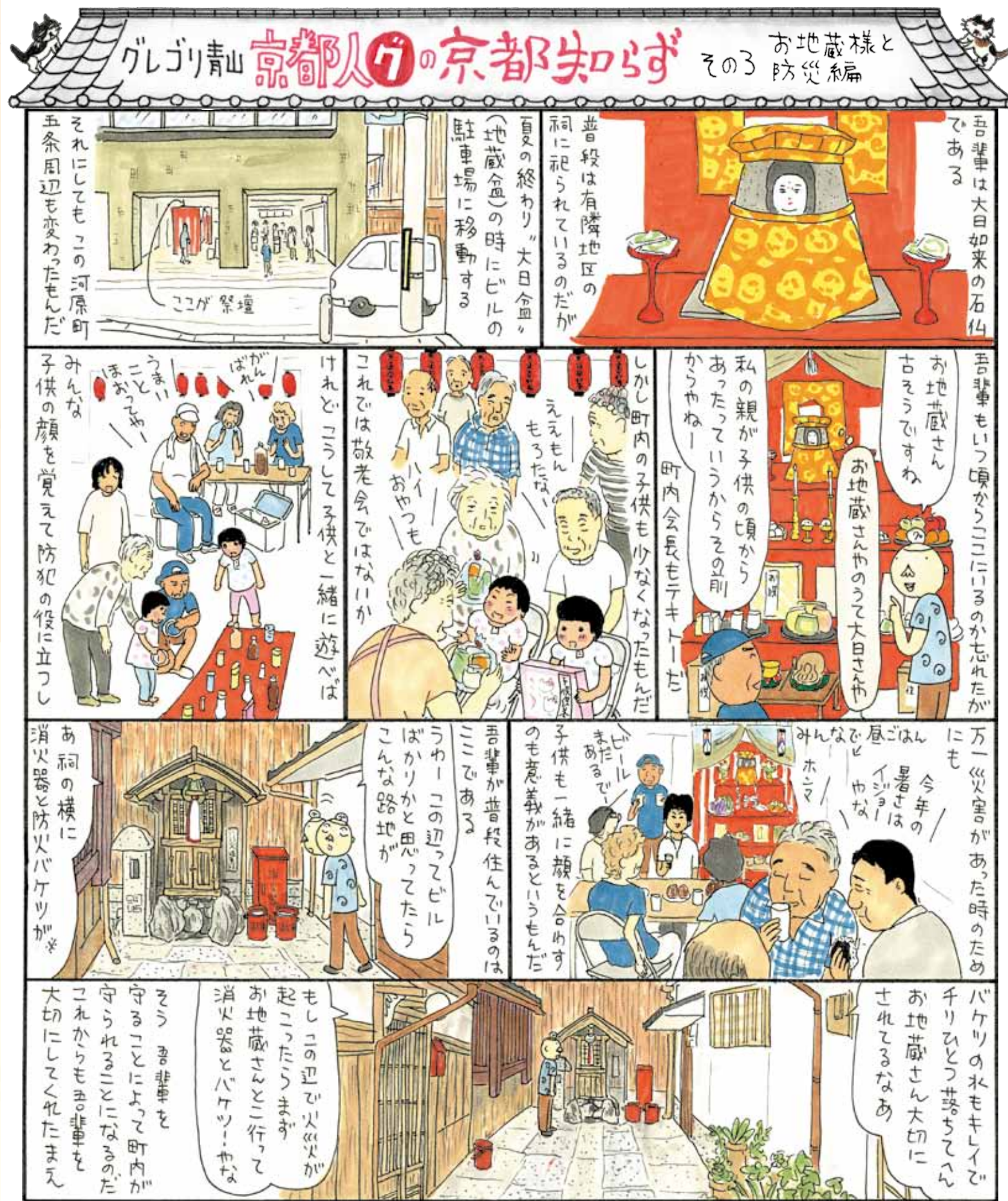
京都市景観・まちづくりセンター



※センターへお越しの際は公共交通機関をご利用下さい。



公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンターは
環境負荷低減に努めています。



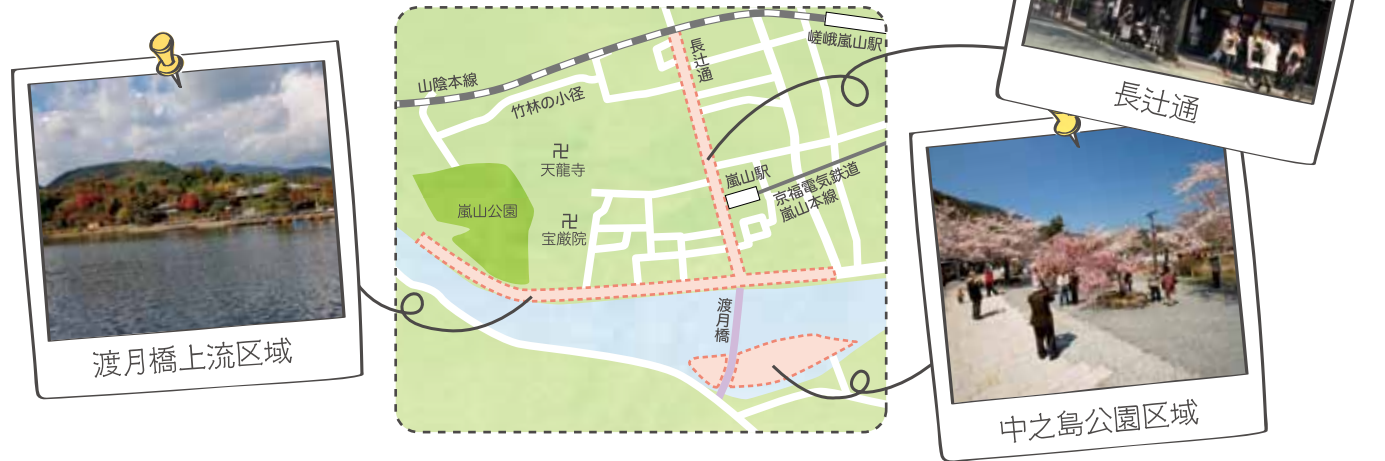
※有隣学区では、お地蔵様のそばに消火器や防火バケツがよく置かれ、お地蔵様が防災の目印になっています。

嵐山まちづくり協議会が 11番目の地域景観づくり協議会に認定!!

京都を代表する観光地嵐山に嵐山まちづくり協議会（以下「協議会」）が
設立され、京都市の認定を受けました。
地域で最初の問題提起がされてから足掛け8年という時間をかけて設立された
協議会のこれまでの取組をご紹介します。

嵐山まちづくり協議会の対象エリア

協議会の対象エリアは、嵐山のメインストリートである長辻通と
渡月橋から見える川沿い、中之島公園です。



まちづくりのきっかけ

嵐山は風致地区に指定されているため、厳しい規制に守られていると地域では考えられていました。しかし、
実際は天龍寺の塔頭のすぐ横に塔頭の高さを超える建物を建てることなど、規制の内容と地域の方
達のイメージにズレがあることが分かってきました。

いくつかの建物が建て替えられる経験をする中で、**地域で嵐山の景観にふさわしい建物とはどのようなものか協議をする場が必要だ**との声があがりました。**その場として嵐山の皆さんが選んだのが、「地域景観づくり協議会」制度**でした。地域の方々が想いや方向性を共有し、更には、その地域で新たに建築等をしようとする人達と一緒に地域で景観づくりを進めていくことを目的とした仕組みです。まちセンが派遣する景観まちづくりの専門家のサポートを受けて、活動が始まり、協議会を設立する準備会も立ち上げました。

地域景観づくり協議会 における意見交換

建築主

嵐山まちづくり協議会
(住民・自治会・商店街)

建築行為の前に意見交換が必要

色々な立場の方が力を合わせる仕組み

嵐山は世界的な観光地であり住民だけでなく観光客向けの事業者が多く、地域には自治会・町内会をはじめ、商店街の組合や同業者団体等数多くの団体がそれぞれ活動を行っています。**多様な立場の方が嵐山の将来を共に考えていく仕組みをどうつくるかが協議会設立にとって大きな課題**でした。

意見のとりまとめの難しさが設立までに時間がかかった要因のひとつでもありました。多様な立場の方達との話し合い、調整を経て、協議会の概要案は設立準備会のメンバーが一軒一軒手渡して配布・説明し、少しずつ賛同を広げました。**結果的に天龍寺、自治組織、同業者団体が参加し、区域内の9割以上の賛同を得て協議会を設立することになりました。**

若手メンバー中心の徹底した議論

設立準備会では、若手メンバーを中心に**先進事例の勉強会、ワークショップなども行いながら徹底した議論を行いました**。そもそも「景観」とは何か、他人が所有する敷地に建物を建てるにあたり、第3者がどこまで物を言っているのか、といったことからの議論でした。**紆余曲折を経て、今後の協議会の運営、嵐山のまちづくりを進める上での礎が出来あがりました**。これまで嵐山を牽引してきた重鎮の方々もその議論を辛抱強く見守ってくれました。

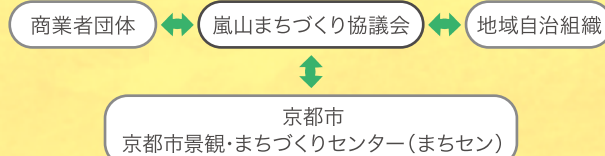


協議会の設立



こうした取組を経て、平成30年4月に嵐山まちづくり協議会が正式に設立され、平成30年8月に、京都市から地域景観づくり協議会の認定を受けました。

嵐山まちづくり協議会の連携図



これからに向けて

協議会では、現在「**地域景観づくり計画書**」に向けた取組を始めました。嵐山の魅力は、山、川、竹林などの自然資源と渡月橋や社寺などの歴史資源が絶妙なバランスで渾然一体となっている点にあります。**新しく建つ建物を、自然や歴史的風景にどうなじませていくか、**が課題だと考えられます。

まちセンは、長年地域を支えてきた専門家と共にこれからも地域のサポートを行っていきます。

牧野会長から

協議会は、住民の方々や商いを営んでいる方々と共に意見を出し合い、嵐山のまちづくりの考え方を計画書として形にしていきます。**新しく建つ建物の建築主との協議でも、地域の方々と共に嵐山のまちづくりの想いを建築主に伝え、互いに協力してまちづくりができる団体となり、誇りあるまちづくりを進め、世界に冠する嵐山を、後世までも守り継いで行きたい**と思います。



「京都景観ゼミナール」 から始める 景観まちづくり

第一回 10/12開催 「景観まちづくりへの第一歩」

京都市の担当者から、京都市の景観政策や景観賞の事例から、景観まちづくりに対する考え方を学びました。

第二回 10/27開催 「景観まちづくりの現場探索！」

景観まちづくりが活発な姉小路界隈で、気になる町並みや建物を撮影しながら「まちあるき」をしました。振り返りでは、撮影された写真を地図に落とし込みながら、景観づくりの工夫や課題に思われた点について、その理由や改善のための提案を交え意見交換と発表を行いました。



まちあるきの様子



振り返りの様子

第三回 11/2開催 「実践者のお話を聞こう！」

第二回で歩いた姉小路界隈で景観まちづくりを進めてこられたお二人を講師にお招きし、活動の中で活用している制度や、姉小路界隈から京都市内各地へ展開した安心・安全な「みち」づくりの取組事例などをお話いただきました。



発表の様子

講師 谷口親平氏（姉小路界隈を考える会 事務局長）
杉崎和久氏（姉小路界隈を考える会 評議員／法政大学教授）

第四回 11/16開催 「私のまちの景観は？」

受講生自身が気になっている景観や、これから景観まちづくりに取り組んでいきたいと思う地域の写真を持ち寄り発表を行うとともに、まちづくりに役立つ情報収集を学び、地域の歴史や現状への理解を深めました。

これからの講座では、自分に関わるまちの課題発見や、課題を解決するためのアイデアを出し合いながら考えを深めていきます。

オモテノマをにぎわいの空間、交流するための町家へ

平成29年度京町家まちづくりファンド改修助成事業

京町家まちづくりファンドは、京都らしい町並みの保全と京町家の再生を支援するため、平成17年に設立された基金です。今回は、平成29年度にファンドの助成事業制度を活用して改修された京町家4軒の中から、2軒の町家をご紹介します。それぞれ所有者の思いの詰まった京町家がどのように改修されたのか、ぜひご覧ください。

西森邸

Before



After



平成28年に西森光男氏よりまちセンへご相談いただきました。神泉苑近くに建つこの町家を門前町にふさわしい外観にしたいと強く望んでおられました。昭和初期に建てられて、奥は染色工場となっており、西森氏も染物の仕事を一筋に打ち込んでこられました。

改修工事前の町家は出入口を扉に変えて、車を入れられるように鉄製シャッターを設けていました。公的指定を受けることも視野に入れて検討しましたが、中庭や染色工場の部分も当初の建築よりも改変されている箇所が多く、まずは外観工事のみを行い内部については順番に計画していくこととなりました。

京町家まちづくりファンド改修事業選定の際の視察会では、西森氏の友禅作品を見ながら建物の外観を整えたいという思いとともに、その染物の歴史をオモテノマの空間で多くの方々に見ていただきたいという思いも熱く語られました。

今回の改修ではシャッターを撤去した後は耐震のことを考えて袖壁を造り、オモテ出入口は格子引き分け戸としました。

今後はオモテの土間部分を染物の展示をするため少しずつ整えられるそうです。



左官仕上げ中

西森氏の染物



俵邸

Before



After



俵秀史氏よりまちセンへご相談いただいたのは平成28年の夏のことでした。最低限の構造改修を行いたいという希望とともに、この町家をどのように活用していけばよいだろうかというお話でした。

所有者である俵氏の実家で、昭和50年代まで豆腐店を営んでおられたとのことで、その由緒や文化的背景を明らかに残すために「京町家カルテ」の作成をご提案しました。「京町家カルテ」の文化レポートでは、専門相談員の城市智幸氏により地域の歴史や変遷などが詳細に調べられ、この町家の履歴や痕跡も丁寧に調査されたことで、改めて大切に残していきたい町家であることを再認識することになりました。改修工事にあたり、設計監理も城市氏にお願いされました。改修工事前は豆腐店の土間であった一部が廃業後に床上げされオモテはアルミサッシに変わっていましたが、主屋の2階や中庭を挟んで建つハナレは大きな改変もなくほぼ建築当初の様子が残っています。

今回の改修にあたり、建物正面左側の部分は建築当初には出入口であったのですが耐震上のことを考えて壁に変更し、正面のデザインも昭和初期によく見られた研ぎ出しの腰壁に木製建具としました。建築工事では、俵氏も積極的に関わり電気工事は自ら施工、床板張りは大工さんに指導してもらいながらきれいに完成させました。とても大変であったとは思いますが、それ以上に楽しまれている様子です。昔はオモテの土間空間がお店としてにぎわっていたので、なんとかこの町家を生かしていきたいと考えておられます。

今後は、この町家をにぎわいのある空間として、住まいながら「交流するための家」として、いろいろ考えている様子も楽しそうでした。



平成29年度選定のうち1軒は大塀造りの町家。大屋根の葺き替え改修をされて、今年度歴史的風致形成建造物に指定されました。
もう1軒は現在工事中。完成に向けて最終の仕上げをしているところで所有者の方も待ち遠しい様子です。



人見梁を入れ替えました

お豆腐屋さんの頃の
図柄からデザイン
しました



すてきなものが
置いてあります



京都市電の路線図板を利用して作った時計



オモテの土間



有斐斎弘道館 館長
濱崎 加奈子さん

私と京都

歴史ある学問所 守り続けたい

御所の西にあって露地庭と2つの茶室を有する数寄屋建築である有斐斎弘道館が取り壊しの危機にあったのは10年前のことだった。自身の住まいでもなく仕事場でもない、偶々友人が借りていたという所縁だったが、上長者町通から北へと伸びる細い路地の先に広がる座敷には、何ともいえないゆったりとした時間が流れていて、窓から眺める庭は鬱蒼としてはいたものの、不思議に心の惹かれる場所だった。それもそのはず。江戸時代には門弟三千人が集ったという、儒者皆川淇園の学問所址だったのである。

その後、この場所を守る活動に専念するようになり、10年の月日が流れた。つくづく、建物を守ることを大変さとし、いかに先人が心をかけてきたのかを知る日々である。同時に、この地が学問所であったということから、現代の学問所を目指して活動が続けてきたが、益々この場を守ることの重要性を感じている。

京都が学びの地であったというのは、単に都だからではなかっただろう。京の魅力の一つに山紫水明の恵まれた自然環境があげられるが、しかしながら海山の幸にあふれているわけではなく、自然だけなら他にもっと豊かな地もあるだろう。本当に人々を引きつけてきたのは、とりもなおさず人々が作り上げ

てきた営みの積み重なりそのものであり、そこに蓄えられてきた無形の知恵である。それゆえ「人」を求めて全国から人が集まり、淇園の学問所にも三千人が集ったのではないだろうか。

そしてその知恵の厚い層はどこに蓄えられてきたのかというと、それは実は、建物や庭という「場」なのではないか。茶碗に、所持者の来歴や、誰それがいただいたという目にみえない履歴が残り、それが価値をもつように、建物や庭にもまた、目にははっきりとは見えないけれどもその履歴はしっかりと残されている。そこに誰が住まいし、誰が集い、何をしてきたのかという、魂が残されているのである。

京都ではいま、一日に2軒という驚くべき速さで町家が失われている。それは、私たちが築いてきた文化を、自らの手で壊しているのと同じことである。目には見えない無形の文化が、その建物に宿っていて、一度壊せばその履歴は二度と取り戻すことはできない。学びとは体験であり、それを知ることは文化を継承するということである。学びと継承が一体であるからこそ、京都は京都であり続けてきた。先人の知を体感できる場がなくなれば、それはもはや京都ではない。このことを、認識すべき時だろう。

京都人への京都失くさず 編集後記

五条通の北に広がる有隣学区。都心なので高いビルも多いですが、細い道に入ると、京町家やお地蔵様の祠があちこちに残っています。夕暮れに散歩すると、京町家がシルエットになり、タイムスリップしたような感覚を味わえます。

この有隣学区では、3年かけて防災まちづくり計画を進めています。地域の人達が「まちづくり委員会」の中で、専門家とまちあるきをしてマップを作成し、計画策定に向けて話し合いを進めているところです。

まちあるきをした時、お地蔵様のそばに消火器や防災バケツがあるのを、よく見ました。お地蔵様が防災の拠点、人のつながりの拠点にもなっているのです。

木造の京町家と路地は、防災上の課題を抱えてもいます。景観を守りながら、災害に強いまちづくりをどのように進めていくか。これからも考え続けたいと思います。

(田中)



著者：グレゴリ青山

漫画家、イラストレーター。1966年、京都市生まれ。壬生の地で生まれ育つ。現在は京都府亀岡市在住。京都人による京都発見本『深ぼり京都さんぽ』（集英社インターナショナル）、京都が舞台の少女漫画『薄幸日和』（小学館）、京都のガイドブック『ねうちもん京都』（KADOKAWA）など、京都関連の著書多数。

第12回 地域まちづくり・京町家の専門家紹介

まちに寄り添い、幸せの居場所づくりを

当財団は多くの専門家の方々のご協力のもと、地域のまちづくりや京町家の保全・再生に関わる事業を行っています。このコーナーでは、豊富な経験や知識、また熱い思いをもって京都のまちに関わっておられる専門家の方々をご紹介します！

今回は
この方！



ふじ はら いち 藤原 英一氏
まちづくりコンサルタント 株式会社サンワコン地域計画部
技術士 建設部門／一級建築士

福井大学工学部環境建設工学科卒業。株式会社サンワコンに入社し、建築・都市計画やまちづくりに携わる。これまで、空き家対策、防災まちづくり活動支援など、数多くの京都市のまちづくりに携わっている。43歳。

大工だった祖父の影響もあり、漠然と建築家になりたいと考え、大学は建築学科に進みました。大学2年の時、「都市計画の最大の目的は人々を幸せにすること」という言葉と出会い、そんな言葉を自然に仰る恩師に惹かれ、都市計画・まちづくりの世界に入りました。「人々を幸せにする」ということは今も自分の根底にあり、そのために何ができるかを考えています。

入社1年目から、国土レベルの道路整備をめぐる地域と行政が対立している地域のまちづくりのコーディネーターをする貴重な機会を得ました。その経験を通じて、難しい大変な仕事ほど多くの人が困っているということであり、その分やりがいも大きいと学びました。



実際にまちを歩いて問題点を確認

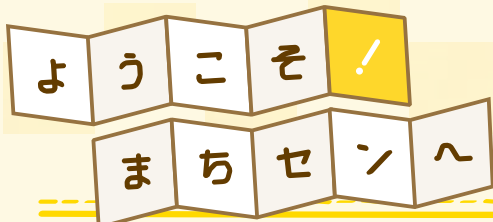
よく言われることですが、まちづくりに答えがありません。本当の意味で地域に「寄り添う」とは、どういうことかいつも考えています。単に、地域が求めることをやるだけでは駄目ですし、入り込み過ぎてよくありません。自分たちはあくまでも黒子であり、地域の人たちに「やってよかったわ」と思ってもらえることが一番大切です、自分に関わることで、一人でも多くの方にそう思ってもらえると嬉しいです。

ある程度まちづくりが軌道に乗ると、地域が自らまちづくりを進められるようにバトンタッチしていくことも大切です。関わった地域から離れていくことは寂しいですが、久しぶりに会っても地域の人たちと変わらず話ができることは大変嬉しいものです。

今後の夢は、どこかの地域で温泉を掘って、夕方、そこに地域の人たちが風呂に入りに来て、「今日はいい天気だったね」なんて言い合えるような、そんな居場所をつくりたいと思っています。そんな日常の風景をつくり出せるようなまちづくりに、自分が役に立つことができればとても幸せだと思います。



子どもたちと一緒に
災害に強いまちづくりを考える



視察でまちセンを訪れた方をご紹介します「ようこそ！まちセンへ」。
今回は京都市立銅駝美術工芸高校の生徒のみなさんです。
1年生の生徒さん5人が、10月に訪問取材のため、まちセンにいらっしました。



京都の景観を守る制度について
質問する銅駝美術工芸高校のみなさん



銅駝美術工芸高校は、明治13年に創立された「京都府画学校」の流れを受け継いでいます。訪問取材は「京都の美を探る」というテーマの学習で行われました。生徒さんたちは、京都の古いまちなみに魅力を感じ、京都の景観がどのように守られているのか、調べようと思われたそうです。

生徒さんたちのインタビューには、当財団事業第二課の野間課長が答えました。「京都では無電柱化が進み、美しいまちなみが形成されていますが、地震や自然災害への備えはできていますか？」

「観光客が増え、ホテルが多くなりました。昔ながらのまちなみを守りつつ、ホテルを建てることはできないでしょうか？」

「看板の色彩に規制があるのは、なぜですか？」

こうした質問に答えながら、京都では景観を守るため、様々な規制があること、その結果、まちの魅力が向上していること、古い建物が情緒を生み出していることをお伝えし、もし機会があれば、京町家を訪ねて、そこでの生活を想像することを勧めました。

インタビュー終了後、生徒さんたちは、「今の京都のまちなみには、様々な人の思いが表れていることがわかりました。自分たちもこのまちに暮らす者として、昔ながらの京都の姿を残していくのに協力したい」とおっしゃっていました。